

令和4年度 第1回 サステナビリティ委員会 概要

<開催概要>

- 日 時：令和4年8月5日（金） 14時00分～16時15分
- 場 所：三重県農協会館 5階 大会議室
- 出席委員（50音順、敬称略）：
 - ・三重県商工会議所連合会 専務理事 喜多 正幸
 - ・三重大学 ESD-SDGsクラブ 代表 小西 凌
 - ・志摩市 政策推進部 SDGs推進監 坂井 陽
 - ・四日市地域環境対策協議会 田邊 和久
 - ・三重大学 特命副学長（環境・SDGs） 朴 恵淑
 - ・大阪産業大学 デザイン工学部 環境理工学科 准教授 花嶋 温子
 - ・国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）
リスク管理部 統括部長 吉岡 恒

<議事概要>

○事務局説明

- ・資料2-1～2-5に基づき、以下の事項を説明。
 1. 「三重県環境基本計画」の推進・進捗状況について

○質疑応答・意見交換等

- ・事務局の説明を受けて、以下のとおり質疑応答、意見交換等を実施。

【委員】

- ・脱炭素に関して、三重県の特徴として産業部門の温室効果ガスの排出量が多いことから、2050年の脱炭素社会の実現に向けて産業部門、重工業部門の取組について特に努力すると良いかと思う。
- ・脱炭素の取組に関して、資料2-2（P2）に「緩和」と「適応」を気候変動対策の両輪として施策を進めるとのことであったが、「適応」の具体的な取組の記載がなかった。「緩和」を優先するのは理解できるが、適応の取組も重要になってくると思う。
- ・資料2-5で、「きれいさ」と「豊かさ」の記載があるが、それらは相反するものと思うが考え方を教えていただきたい。

【事務局】

- ・温室効果ガスの排出量について、重工業部門の割合の把握ができてはいないが、産業部門における96～97%程度が、製造業になっており、非常に製造業の割合が高い状況である。
- ・三重県の特徴として、軽質油性が55%程度を占めているため、おそらく重工業部門の割合が多いかと考えている。軽質と重質合わせると大体70%程度の油の使用量である。

- ・また、現在、他部署（戦略企画部）でゼロエミッションみえプロジェクトを進めており、四日市コンビナートの脱炭素化などの取組を四日市市等と連携しながら進めている。ゼロエミッションみえプロジェクトは、産業部門における脱炭素への取組を企業の成長に生かしていくものである。
- ・「適応」の部分については、今回報告はさせていただいていないが、県としては、外部の団体として設置している唯一の県であり、三重県環境保全事業団に適応センターを設置し、取組を進めている。
- ・現在は、適応に関するさまざまなセミナーを開催するなど、国の補助金を受けながら事業を進めているところであり、引き続き、同センターと連携しながら、取組を進めていく。

【事務局】

- ・「きれいさ」と「豊かさ」について、一般的に汚くなると富栄養や過栄養といわれ、赤潮や貧酸素が発生するなど環境が悪化し、生物が生息できなくなり、「きれいさ」がなくなる。
- ・一方、きれいになりすぎると、餌が少なくなり、生物が育とうとしても痩せてしまい、うまく産卵ができず、「豊かさ」がなくなっていく。
- ・「豊かさ」は、適度な栄養がある状態が良いと言われており、現在、その適度な部分についての調査・研究が進められている状況である。
- ・実際、兵庫県は、瀬戸内海で環境基準の上限値に加え、下限値を設定するなど、水質をコントロールする取組が進められているところであり、本県においても水質管理の考え方が重要と考えている。

【委員】

- ・今回の説明の中で、環境教育の項目が見当たらずに少し驚いたが、環境教育の取組等について教えていただきたい。

【事務局】

- ・環境学習関係の取組の報告がなくて申し訳ない。今回、報告はしていないが、環境学習や環境教育の取組については、現在、子ども向けの環境教育に関する情報発信や出前講座などを実施しているところである。これまでの公害だけでなく、最近は自然環境保全やSDGsなどの内容を取り入れている。
- ・また、温暖化防止の関係であれば地球温暖化防止センター、気候変動に関することであれば、気候変動適応センターでもそれぞれ情報発信しており、それ以外の内容について、環境学習情報センターで行っているところである。

【委員】

- ・さきほどの環境学習の話について、気候変動と地球温暖化防止の取組が別の団体で行っている話であったと思うが、その2つがどう違うか教えていただきたい。
- ・例えば、気候変動と地球温暖化防止、資源循環の話を別の部署で行うのではなくて、全てどこへいっても、その話がまとめて聞けるような体制はできないか教えていただきたい。

【事務局】

- ・基本的には環境学習、環境教育については、四日市にある三重県環境学習情報センターで行っている。
- ・役割的には、環境学習センターでは、子ども向けに温暖化防止も含めて全般的な話をさせていただいており、もう少し専門的な情報であれば、地球温暖化防止センターや気候変動適応センターで情報発信等を行っている。
- ・地球温暖化活動防止推進センターは、地球温暖化対策防止法に基づき設置されている。適応センターは、気候変動適応法に基づき設置されている。この2つについては、温暖化と適応に特化したものになっており、広い環境学習については、環境学習情報センターで担っている状況である。

【委員】

- ・各委員の意見はもっともで、管轄が違くとそれぞれ行っているつながりが無いわけではないが、お互い見えにくいのかなと私自身も感じることもある。
- ・9月19日に、環境学習情報センターが温暖化に係る研修会を行うということで、私にも声がかかってきた。短い時間だが、同じような活動をしている方が同じ場所に集まって、受け手の皆さんにもわかりやすく説明していくこととしており、手と手を結ぶような形になったのかなと感じた。
- ・せっかくこのような人達が集まっているので、何らかの形で、外から見た場合でも、活動をしているんだなということに分らせるような工夫が必要ではないかと思う。参加型の運動をどんどんやっていきたいと思っているので、また、お力を貸していただきたい。

【委員】

- ・2030年のめざすべき三重の姿からすると、県民の方からみて、環境学習が縦割りにならないように統合的にできると、サステビリティレポートを作っている意味がもっとでてくるかと思う。
- ・また、予算の出所や元々の法体系が違うからなど言うと、隙間ができたり、重複することがあると思うので、その辺りの連携がサステビリティレポートなどで、うまくやっていると良いのではないかと思う。

【委員】

- ・ペットボトルのボトル to ボトル促進モデル事業について非常に面白い取組をされていると思うが、2030年の三重のめざす姿は、たくさんのペットボトルをボトル to ボトルでリサイクルかという、そうでは無いと思う。
- ・例えば、ペットボトルのリサイクルを促進するがあまり、リユースのガラス瓶を殺してしまっていないか。ペットボトルをリサイクルすれば良いというような認識が皆の中に広まっていないか。そうではない世の中を作っていかなければならないということ、県民に示しながら、ボトル to ボトルが促進されるような位置づけになると素晴らしいと思う。
- ・リユースのボトルを殺してしまわないような政策をお願いしたいと思う。

【事務局】

- ・本県のプラスチック循環の考え方としては、ボトル to ボトルは、県民の方にとって一つの分かりやすい取組であると考えており、ボトル to ボトルだけを行うというわけでない。
- ・これまで、ペットボトルはフィルムなど異なる物にリサイクルされてきたが、ボトル to ボトルでは、ペットボトルからペットボトルが作られるため、海外から新しい原料を輸入しない。この取組は、地球温暖化対策にも貢献しており、県民の方に、このようなことが分かってもらいたくて行っている一面もある。
- ・また、現状、プラスチックだけでなく、製品プラスチックやその他プラスチックなど雑多なものもたくさん発生しており、対策が必要となっている中、プラスチック資源循環法が施行され、プラスチックをいかに分別してリサイクルに回すかということがより一層重要になってきている。
- ・本県としては、ペットボトル以外の製品プラスチックを光学選別し、できるだけ燃やさないようにし、マテリアルリサイクルに回すように取り組んでいるところである。
- ・今日ご指摘いただいたガラス瓶についても、今後、施策に反映していきたいと思う。

【委員】

- ・最終的には、ペットボトルで水分を補給するのではなく、水道水から水を飲むような取組、例えば、冷水器などを公共施設に設置し、そこに行けばペットボトルを使わず誰でも水を飲むような仕組みに向かって進めていかなければならないのではないかと思う。
- ・それは最終形であって、現状ではペットボトルが必要な場面もあったりすると思うが、ペットボトルは、そのような意味合いもあるんだということを認識して、県民の皆さんにお知らせしながら、ボトル to ボトルの取組を進めていただければと思う。

【事務局】

- ・ボトル to ボトルだけでなくさまざまな施策をしているが、まずは、表明というかコミーシャルしていくことが重要である。

【委員】

- ・志摩市は海に囲まれている地域であり、英虞湾を有している。その中で環境の保全や水質改善の取組を進めており、以前、県とも英虞湾の再生事業をやらせていただいた。
- ・資料2-5（P4）にある豊かな海をめざして、海の栄養がなくなっている状況で、市でも下水道の基準緩和の要望も聞いたりしている。県の方で、下水道の基準を緩和することであるが、参考の事例があれば教えてほしい。

【事務局】

- ・今回、県としてはじめての取組であり、他にあまり例がないところである。第9次総量削減計画の中では、事業場が200程度の業種に分かれており、それぞれで基準の範囲が決められ、県で基準を決定することとなっている。5年ごとに、見直しをしている。
- ・今回は下水道業のみの基準を緩和し、生物にとっての効果・検証をしていくこととしている。兵庫県などでは、栄養塩管理計画を策定し、工場・事業場の排出基準を緩和する取組

などもしており、効果・検証の結果次第ではそのような動きにつながっていく可能性もある一方、悪い結果が出ると元に戻すということもあり得る。

【委員】

- ・これまで定めてきた基準は、一般市民的にはきれいな海、きれいな水質というところを考えていると思うが、実際現場で働いている漁業者などは栄養が足りないということを感じており、まずはチャレンジして取り組んでいくことは大事になってくるため、志摩市も取り組んでいければと思う。

【委員】

- ・我々、脱炭素社会いわゆるカーボンニュートラルに取り組んでいるところであるが、非常に厳しいテーマであると考えている。
- ・ペットボトルのマテリアルリサイクルの話もあったが、弊社の製品でマテリアルリサイクルというとなかなか難しく、カーボンニュートラルの最終形をどのような形でもっていけばいいのかと社内でも検討しており、良いアイデアが無い状況である。
- ・こうゆうところから着手すればいいのではないかなどアドバイスがあれば教えていただきたい。

【事務局】

- ・脱炭素の取組については、非常に企業が進んでいる中で、県の方がだいぶ遅れているような状況である。
- ・県の温室効果ガス排出量は、その他業務部門になるが、製造業と異なり電気使用量が多くを占めており、環境省の方においても、これからは創エネをしながらどのように取り組んでいるかという点に重きが置かれている。
- ・特に三重県は、産業部門において、重工業や石油化学系が多く、四日市コンビナートにおけるカーボンニュートラルに向けた取組として、現在、水素やアンモニアなど燃料の転換などについて、ゼロエミッションみえプロジェクトの中で検討されているところである。
- ・答えにはなっていないが、県としてこれからは電気をどのように創りながら、脱炭素に取り組んでいくのか。新たな開発は難しくなっている中、太陽光パネルを設置できる場所は、遊休地や駐車場を活用する創エネなどに取り組んでいければと考えている。

【委員】

- ・今日の話の中で、どれも経済活動とは切り離せない話であると思う。
- ・商工会議所ではどの分野に一番関心があるかという現状について話をさせていただく。
- ・今日の資料の中でいうと、やはりカーボンニュートラルなのかなと思っており、商工会議所でも、今日の資料2-2(P3)に記載のある「脱炭素社会に向けたビジネスの創出」について、これまでのエネルギーの使い方と異なり、社会が変わっていくということは事業者も皆認識している。
- ・カーボンニュートラルは大企業だけでなく、中小や小規模な企業、商工会議所に入っている事業者の皆さんも一緒になって取り組まなければ達成できない目標である

という認識は事業者も皆持っている。

- ・現状、さまざまな相談が各商工会議所にある。商工業者や経済団体と関わっている部分はどちらかといえば、雇用経済部が窓口になっているが、最終的には社会全体の環境に繋がりが、カーボンニュートラルにどう取り組んでいくのかは、非常に事業者の皆さんは関心を持っている。
- ・三重県商工会議所連合会で、神戸市にある水素の貯蔵施設を視察に行った。そこで聞き取った話では、技術的には水素を貯蔵して、エネルギーとして活用することはできるとのことであった。2030年には商業化するとの話であり、コストが合えば、実現される分野であると感じた。
- ・商工会議所として、カーボンニュートラルに向けて、事業者に対する行政的な支援も必要であると考えており、そのような要望等を考えている状況である。

【委員長】

- ・皆への宿題として考えて欲しいことが2点ある。
- ・1つ目が、環境に関する憲法のようなものである環境基本計画についてである。この計画は少し早く2020年3月に策定された。最近では、気候変動危機の問題など、環境に関する動向は目まぐるしく変わってきており、当時は低炭素で良かったが、今では脱炭素、カーボンニュートラルの動きになってきている。
- ・2030年の段階では「低炭素」の表現で問題はなかったのだが、今では脱炭素にシフトしている。「ミッションゼロ 2050 みえ～脱炭素社会を目指して～」が2019年12月15日に前鈴木知事から宣言されたことをふまえて、低炭素からどのように脱炭素にシフトしていくといいのかということが宿題になってくると思う。
- ・2つ目は、約180万の県民の人々と一緒に進めていくには、普及啓発が重要になってくる。誰かが行うのではなく、皆が進んで行っていく形が重要である。皆が考え、皆で進めていくためには、どのように取り組んでいくべきなのか考えることが宿題になってくる。
- ・また、サステナビリティレポートをつくる中で、意外とコラムは皆が読んでいる。コラムをどう考えるのか。例えば、低炭素社会の構築の一つ目のところで、「ミッションゼロ 2050 みえ推進チーム」の取組事例について、さまざまな取組があり、ページ数がある程度限られている中で、どのようなものを記載していけばいいのかなどがある。2つ目の「尾鷲市における脱炭素に関する取組」についても、どのような取組か分かるように、どう考えたら良いかなどがある。
- ・また、三重応援ポケモンについて、広く使えるものなのか、水だけに限られているものなのか教えていただきたい。ポケモンは、子どもたちにとって親しみやすいキャラクターなので、広く使えるようにしていただきたい。

【事務局】

- ・水だけに限られているものではなく、ある程度広く使えるものとなっている。
- ・使用目的が観光誘客、児童等の教育、川や海などの水環境保全に関するものなど、なんでも使えるわけでないが、県が定める使用目的に沿った形で伝えるものとなっている。使用基準等については、確認させていただく。

○各委員からの取組・参考事例紹介

- ・各委員から、今後の三重県の環境施策の参考となるような活動・取組等について、資料3に基づき発表。

【花嶋委員】

- ・環境施設観光の可能性について、ごみの焼却工場の見学ツアーの取組を、アンケート結果等をふまえて紹介。(資料3-1)

【吉岡委員】

- ・NEDOのグリーンイノベーションについて、コンビナートにおける省エネ技術(熱利用等)の活用可能性や熱のマッチング技術などの事例紹介。(資料3-2)

【坂井委員】

- ・地域発生未利用資源の適正管理や学校と連携した事業推進など未利用資源を活用した循環型社会への取組の紹介。(資料3-3)

【小西委員】

- ・鈴鹿市長との懇談や「ミッションゼロ 2050 みえ 若者チーム」の取組、「環境SDGs 学生ネットワーク」の結成など三重大学ESD-SDGsクラブの取組の紹介。(資料3-4)

【百瀬委員(事務局代読)】

- ・資料3-5に基づき、「使い捨てプラスチックのサーキュラーエコノミー推進について」の意見を事務局が代読し紹介。

○委員長総括(まとめ)

- ・今から2年前に環境基本計画が改定されたが、早かったということは良いことであるが、低炭素をどのように考えていくか。今ここで、どうするとういうものではないが、できるだけ早く皆が混乱しないようにし、さらに野心的で前進するような三重県に変えていきたい。